

2011 年 3 月 20 日～29 日 スペイン日本語教育機関訪問（高垣）

<マドリード・コンプルテンセ大学 (Universidad Complutense de Madrid)>

スペインの首都マドリードにあるコンプルテンセ大学は何ととってもスペインを代表する最も伝統的で権威のある大学、キャンパスにもその雰囲気が漂っている。スペイン最古のサラマンカ大学につぐ歴史を誇り、学生数 9 万を擁するといわれる総合大学である。新しくできたマドリード自治大学と対比すべくマドリード・コンプルテンセ大学と呼ばれるが、マドリード大学といえばここを思い浮かべる。私自身 1984 年から 1985 年にかけて、いまでは王立言語アカデミーの有力なメンバーで 1999 年にスペイン語学の最先端研究の成果を『スペイン語記述文法』(Gramática Descriptiva de la Lengua Española)3 分冊に纏め、また 2010 年には何年もの作業を経てアカデミーの文法的知見を結集させた『新スペイン語文法』(Nueva Gramática de la Lengua Española)2 巻を上梓したスペイン言語語学の泰斗イグナシオ・ボスケ(Ignacio Bosque)教授が若かりし頃、その聲咳に接した懐かしい学び舎だ。当時は日本や日本語のことなどまるで無関心の当大学にも、現在では日本語を学ぶ若者が 200 人もいることを知り、隔世の感を強くした。



鈴木裕子先生



センター教員室のある講義棟

そのコンプルテンセ大学で外国語教育を担当するのが高等現代語センター(Centro Superior de Idiomas Modernos : CSIM)だ。2011 年 3 月 23 日 11 時半哲文学部 B 棟の玄関で日本語専任教員の鈴木裕子氏と待ち合わせる。かつてなかった真新しい講義棟が 2 つも増えていて驚く。その一方の講義棟の中にセンターの教員室があった。教員室とカフェテリアで大学の語学教育全般および日本語教育の現状などについて説明を聞いた。

センター全体では 8000 人の受講生が登録し、自由選択科目として単位を出している。英語(半分以上)が中心であるが、スペインの地方言語であるカタルーニャ語、ガリシア語、バスク語のほか、現代ギリシャ語、セルビア語、クロアチア語、ハンガリー語、イディッシュ、デンマーク語、スウェーデン語などの言語を含め 32 の言語が学べる。正規学生の他

に研究者・事務職員、中高の教員にも開放されている。

200 人の学生が登録する日本語は 11 クラスに編成されている。ヨーロッパ言語参照枠 (Marco Común Europeo de Referencia para las Lenguas) に応じたクラス数は以下である。A 1 クラスは 12 人が最小数、A 2 以上は 10 人を超えないとクラス編成ができない。

A 1-1 5 クラス

1-2 2 クラス

A 2-1 2 クラス

2-2 1 クラス

B 1-1 1 クラス

1-2 1 クラス

日本語は鈴木氏をコーディネーターとし、非常勤で他に 3 名の日本人教員が加わる。10 年ほど前に 1 クラスから始められた日本語教室はこうして履修者が順調に増加し、現在では 11 クラスになっている。日本研究の専門課程はなく、いわゆる第二外国語として学ぶ学生はさまざまな学部（医学、物理、歴史、言語学など）から受講している。スペインでは普通である夜間クラスには当然社会人の参加が多く仕事、趣味、卒業生などの比率が大きくなるとのこと。他大学でもそうであるが、動機の大半がマンガ・アニメから出発するが、上級生になるに従って現代日本を映す「いじめ」、「ひきこもり」、「拉致」、「日韓関係」、「ポップアート」など多様な対象に関心が広がっていく。授業の半分は日本文化を伝える構成になっている。「文化」もいわゆる伝統的な内容のいわば大文字の文化と現代日本の社会に見るいわば小文字の文化に対する興味と両方が見られるという。いずれにしても一つのことを精神的に追い求めていく日本らしさに惹きつけられて一般的傾向が見られるとの話である。近い将来、スペインを代表するコンプルテンセ大学に日本語・日本文化の専門課程が生まれることを願ってやまない。

<スペイン日本語教師会>

鈴木裕子氏には、また 2010 年 2 月に結成されたばかりの「スペイン日本語教師会」(Asociación de Profesores de Japonés en España: APJE)についてもその経緯や現状を聞いた。氏がその会長を務められているのである。

お話によると、大学・公立語学校などを含め百数十名の日本語教師がスペイン全土で活躍しているが、そのうちの 90 人ほどが加わる日本語教師会がこのほど正式に動き出した。これまでバルセロナ自治大学やバルセロナ公立語学校をはじめバルセロナにあった中心が、首都マドリードに本部（会の事務局は後述の国際交流基金マドリード日本文化センター内に置かれる。www.apje.es）を置くことにより名実ともにスペイン全国を網羅する運びとなったようだ。

会の規約によると主な事業としては、スペイン国内の日本語教師間のネットワーク（ホームページ、メーリングリスト）を構築するほか、スペイン日本語教育の現状を把

握すべく資料・情報の収集を行い、日本語教育研究会・研修会・シンポジウムなどを開催する。また日本およびスペイン国外の日本語教育の公的機関と連絡を取り、教科書の調査・教材開発・研修会（日本語教育セミナー・日本語講座等）、教員養成への協力など共同の企画や開発を進める、となっている。内外の関係諸団体および研究者との学術交流も重要な柱である。

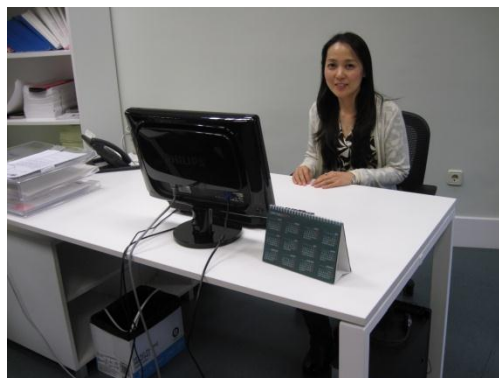
これまで長く日本語能力試験はバルセロナ自治大学を会場としていたが受験生の増加とともに 2006 年からマドリードでも開催されるようになった。日本人だけではなくスペイン人の会員も含め、日本語教師の研修や研究会を開いたり、地方で個人、語学校などに対し基礎的な研修を行ったりしている。教師会と時期を同じくマドリードに開設された国際交流基金の「マドリード文化センター」から、研修会のホール使用や教師の派遣費用の一部支援を受けたりできるようになったことも幸いであったとのことである。

<国際交流基金マドリード日本文化センター(Fundación Japón, Madrid)>

同日午後、国際交流基金の「マドリード日本文化センター」(www.fundacionjapon.es)を訪れた。折しもの東日本大震災との関連で急きょバルセロナに出張中の所長代理上野宏之氏に代わって同センターの日本語教育専門家の熊野七絵氏に同センターの活動や取り組みについて説明を受けた。



マドリード日本文化センター



熊野七絵氏

日本との文化交流を推進しようというマドリード市の「プラン・ハポン」(Plan Japón)の一貫事業として援助を受け、2010 年 4 月にマドリード市の閑静な地区に本センターが開設され、立派なホールもセンターの催しに使用することができ多くの市民の受講が実現している。国際交流基金の事業の 3 本柱はいうまでもなく、芸術・文化の普及、外国における日本語教育の推進、日本研究と知的交流である。上でふれたようにスペイン日本語教師会とタイアップして研修会や地方の講習会、研究会などにも力を入れている。



図書室



図書室のスタッフと

建物の4階のフロア全体を占めるセンターには数名の現地スタッフが勤務し、図書室では教科書類を含む図書、マンガや視聴覚教材が利用できるようになっている。教科書などの資料は地方の教師には貸出サービスがあり、日本映画上演(ちょうど、「日本の熱い血：ヤクザ映画シリーズ」La Sangre Caliente de Japon: Ciclo de Cine Yakuza が企画されていた)や「江戸時代の大衆・都市文化」Cultura Popular y Urbana del Periodo Edo と題するシリーズの文化講座、講演などが企画され市民を集めている。ウェブの日本語教材として、「日本語学習ポータルサイト<NIHONGO e な>」(www.hihongo-e-na.com)や「ウェブ版エリンが挑戦！にほんごできます」(www.erin.ne.jp)が利用できる。



《スペインにおける日本語教育》

ここで、マドリード文化センターの上野宏之氏がまとめた資料「スペインの日本語教育」およびその解説（あるいは国際交流基金日本語教育国別情報「スペイン」の<http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/country/2009/spain.html>）に基づきスペインにおける日本語教育・教育機関の経緯や現状について略述しておきたい。

【背景】

スペインでは 70 年代中頃以降、アジアに対する関心が低い時代が続いた。しかし、EU 加盟後の目覚ましい経済発展の後押しを受け、関心が高まった。2001 年には、政府が掲げた「プラン・アジア」Plan Asia に基づき、スペインとアジア諸国の学術・文化・経済交流促進を目的としたカサ・アジア Casa Asia が設立された。2007 年にはマドリード市で「プラン・ハポン」Plan Japón が策定される。2010 年、国際交流基金マドリード日本文化センターが開設され、市民レベルにおいては、対日評価・対日関心は非常に良好で、伝統文化、日本食、武道などに対する関心が高く、日本のマンガ・アニメに傾倒する若年層を中心に日本語学習者が増加しており、大学、公立語学校のほか、民間語学校において日本語コースが増設されている。

【沿革】

公的機関で正式に日本語が教えられ始めたのは、1975 年マドリード公立語学校(Escuela Oficial de Idiomas de Madrid)が最初である。1980 年代末から 1990 年代にかけて、各地の大学を中心に日本語講座設置の動きが活発化し、2003 年 3 月には東アジア研究(Estudios de Asia Oriental)学士課程の設置が承認され、マドリード自治大学(Universidad Autónoma de Madrid)、バルセロナ自治大学(Universidad Autónoma de Barcelona)、サラマンカ大学(Universidad de Salamanca)、カタルーニャ公開大学(Universitat Oberta de Catalunya)の 4 大学において同学士課程が新設された。2008 年より、サラマンカ大学の東アジア研究課程は学士課程から修士課程に移行された。2007 年オビエド大学および公立語学校(ビゴ、ア・コルーニャ)にて日本語講座開講。2008 年にはサラゴサ大学および公立語学校 2 校(テルデ、オロタバ)において日本語講座開講など全国 20 校以上の大学の付属語学センターなどで日本語講座が設置されている。

1975 年に 1 機関、1 教師で始まった日本語教育は、2009 年の調査では、機関数 59、教師数 131 となっている。このうち高等教育機関数は 18、公立語学校や民間語学校、学校教育以外の合計は 41 機関である。2003 年に比べると、6 年間で教師数は倍増している。

【日本語能力試験】

スペインでは当初バルセロナ市のみにおいて実施されてきたが、近年の受験者数の増加を受けて 2006 年より初めてマドリード市においても実施を開始したところ、その年のスペイン全体の受験者数は前年比約 2 倍と急増した。2007 年、2008 年、2009 年も引き続き増加しているが、2009 年においては、応募者数がバルセロナ、マドリード合わせて 1030 名となり、初めて 1000 名を突破。欧州地域の受験者数で見ると、ロシア、フランス、ドイツに続き第 4 位の位置を占めるまでになっており、スペインにおける日本語ブームを反映しているものと思われる。

【国際交流基金の日本語教育支援活動】

スペインにおける、日本語教育支援活動には次のようなものが挙げられる。

- 1) 教師のネットワークを促進。教師の情報交換・研修会など勉強の機会を設ける。

- 2) 地方の教師支援のために専門家の巡回セミナーを開催。
- 3) 専門家による日本語教育相談。
- 4) リソースセンターとして図書室に日本語教材、書籍、マンガ・アニメ、J-pop, J ドラマなどの資料を開架。教師には教科書など教材貸出サービスも行う。
学習者向けのイベントを開催（サロン・デ・マンガブース出展、無料の上級者向けの会話サロンなど）。



- 5) 開発中の「JFSD 日本語教育スタンダード」に基づいた教材を用いた日本語講座を開講予定。

<バルセロナ自治大学 (Universitat Autònoma de Barcelona) >

マドリードからバルセロナへ移動、3月25日にはバルセロナ自治大学を訪問した。かつて一度国立国語研究所でお目にかかったことがある白石実先生にお世話いただきこの訪問が実現した。先生は、スペインで最も早く1989年にバルセロナ自治大学の翻訳通訳専門学校が設立されたときに唯一の日本語教師として教鞭をとり始められた。当日はご出張中の白石先生に代わって、日本語科専任教員の塙隆敏先生がご案内くださった。

キャンパスはバルセロナの西北、ティビダボの山を超え、カタルーニャ自治州鉄道 Ferrocarril de Generalitat de Catalunya の Sabadell 方面行でちょうど30分のところに位置し、広々として眺めがよい。キャンパス内にはホテルまで完備している。



翻訳通訳学部



塙先生と学部の前で

【バルセロナ自治大学】

1968年に創立された総合大学で、カタルーニャ州の中でもバルセロナ大学(1450年創立)や本学と交流協定を結んでいるポンペウ・ファブラ大学(1990年創立)とともに名門の一つである。スペインの中でも早くから日本語の授業を導入した。

【日本語教育・研究の沿革】

1989年 第二外国語科目となる。日本語教員1名、学生数9名。

1992年 スペインにおける日本語能力試験がバルセロナで実施される。190名応募。

1995年 バルセロナ自治大学翻訳通訳高等専門学校が学部昇格。

日本人教員3名、スペイン人教員1名。学生数約100名。

2002年 翻訳通訳学部東アジア研究コースが学士課程になる。

日本人教員3名。スペイン人教員1名。東アジア研究課程学生数30名。

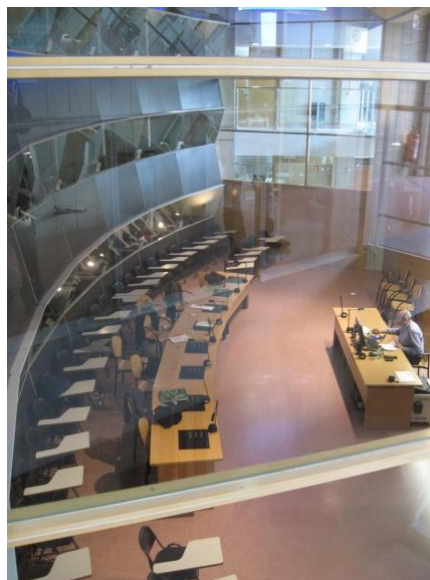
2005年 日本語能力試験応募者が500名を超え、2006年よりマドリードでの実施を提案。

2009-2010年 東アジア研究学士課程（grado）が開設。学生数43名。

東アジア研究と翻訳講座を合せて日本人教員5名。スペイン人教員5名となる。

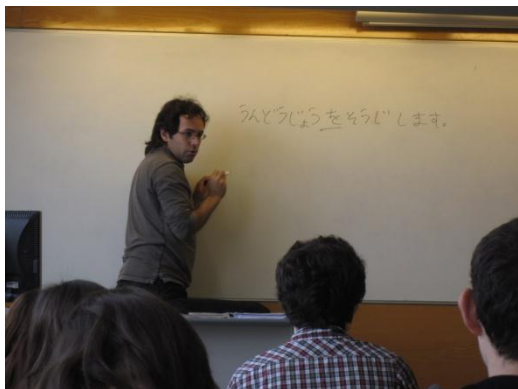


学部長室で

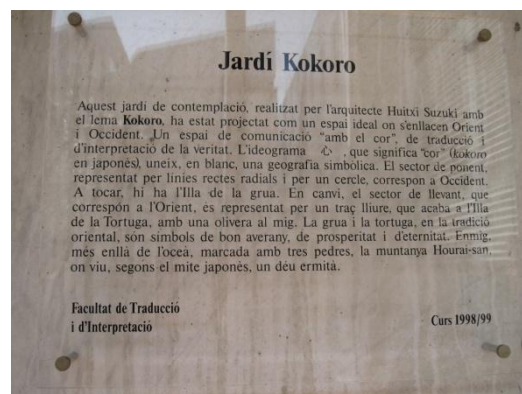


同時通訳ブース教室

訪れた翻訳通訳学部(Facultad de Traducción e Interpretación)は人気が高い学部だ。モダンな講義棟の中には、同時通訳のブース教室が3つもある。国連と同じ仕様だと聞いた。表敬訪問した学部長(Francesc Parcerisas Vázquez)には学部内や同時通訳ブースを案内してもらった。その後、村上春樹をカタルーニャ語に翻訳している若手の Albert Nolla 先生の1年生の授業を参観させてもらい、学生たちとしばらく歓談した。学生たちは翻訳通訳コースの1年生で、まだ学び始めた。圧倒的にマンガ・アニメが動機であるとのことであるが、中にはインディーズの音楽や映画（北野たけし）、武術をやる女子学生などもいた。最後に副学部長で国際交流担当の Jacquie Minett 氏にも表敬訪問をした。



Nolla 先生の教室で



学部内にある「心」の文字を配した「心庭園」とその説明

【日本語科目】

学部には、翻訳通訳課程と東アジア研究課程と2課程があり、どちらでも日本語が学べる。

新しい東アジア研究学士課程(Grado de Estudios de Asia Oriental)では東アジアの経済・社会・政治、歴史・地理・思想・文学・人類学などの科目を履修する他、言語としては第一言語として日本語か中国語、第二言語として日本語・中国語・韓国語を選択する。第一言語は3年から4年にかけて欧州言語参照枠のB1/B2を目指し、また第二言語は2年または3年生(あるいは両学年)で履修しA1/A2を目指す。

一方、翻訳通訳課程には、通訳 / 3外国語 / 翻訳の3つの専攻がある。この課程で学生が学ぶ言語はABCと3つにカテゴリー化した言語群の中からそれぞれ1言語を選択する。Aのカスティリア語(=スペイン語)ないしはカタルーニャ語、Bの英語、フランス語、ドイツ語)およびCの(英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語、イタリア語、アラビア語、ポルトガル語、日本語、中国語)である。翻訳通訳は実際として本国語のAカテゴリーとBの言語とを対象とすることが主で、日本語などのC言語は従の位置づけがなされている。東アジア研究課程に比べると日本語に対する力点は大きくないが、参観させてもらった初

級の授業からは学生の大きな関心と熱意が伝わってきた。データによると、2009~2010 年にかけての登録人数は 37 名である。